3章

【問題】（演習／京大・難関国公立大対応問題）

出典…『建礼門院右京大夫集』／　東京学芸大学　97年

現代語訳

春のころ、中宮（徳子）さまが西八条（にあったお父上の清盛さまの御別邸）に（宮中から）退出しておいであそばしたときに、普通に（西八条邸へ）参上する人々は言うまでもなく、（宮さまの）御兄弟や、甥御さんがたなどが、みな（宮さまの警護の）当番として（西八条邸に）詰めて、二、三人は絶えまなく伺候しておられたのだが、（そんなある日、）桜が満開で月の明るかった夜を、「（そのまま）何もしないで明かしてよいものだろうか（、いやそれではいかにも勿体ない）」と（いうことになっ）て、（宮の甥御の）権亮（維盛）さまが（詩歌の名句を）高らかに歌い上げたり、笛を吹いたりし、（宮の御従兄弟の）経正さまが琵琶を弾いて、御簾の内でも（女房たちが）琴を合奏したりなど、趣深く管絃を楽しんでいたときに、宮中から（藤原）隆房の少将さまが、（高倉の帝から宮さまに宛てた）お手紙を持って（西八条邸に）参上したのを、そのまま（宴席に）呼び寄せて、いろいろな（楽しく風流な）ことごとを尽くして、後になると昔や当時のよもやま話などをして、明け方まで（あたりの美しい風景や月を）眺めていたのだが、桜は（すでに）散っても（まだ）散らなくても（どちらも）同じような（月に）照り映える美しさで、（その桜を照らす）月もいっしょになって（春霞に）ぼうっとけぶりながら、次第次第に明るくなってゆく（東側の）低い空が、（春の明け方は）いつ（でもそうだ）とは言うものの、言葉にしようもないほど風情があったので、（宮さまから帝への）御返事を頂戴して、隆房さんが（宮中へお届けしに西八条邸から）出（て行こうとし）たときに、「そのまま（お帰ししてもよいもの）だろうか（、いやそれではつまらない）」と（思っ）て、（私が自分の）桧扇の端（の板）を折りとって、（次のような歌を）書いて手渡した。

かくまでの……これほどまでの風流を尽くさずに、ごく普通に夜桜と月とをただ見ただけでも（充分に風情のある夜でしたが、即興の宴に興じた今夜こそ、なおさら本当に楽しゅうございました）

少将（隆房）さまは、傍で聞いていても照れるほどに（今の私の歌を）声に出して歌い上げて（そのあとも）口ずさんで、（そのうちに）硯を所望して、「この席にいる人々は、どんなことでも（いいから）みんなお書きなさい」と（言っ）て、（御自身でも）御自分の桧扇（の端を折り取った板）に（次の歌を）書いた。

かたがたに……いろいろ（な風情のある遊び）につけても忘れてしまうわけにはゆかない今夜（のこの楽しさ）を、みなさん心に留めて覚えておいてください

権亮（維盛）さまは、「歌も（ろくに）詠めない（私のような）者はどうすればよいのだろう（、歌だけは勘弁してください）」と言っておられたのだが、それでもやはり（みなに）催促されて、（次のように詠んだ。）

心とむな……気にかけるな、思い出してはいけないと（だれかが）言ったとしてさえ、今夜（の楽しさ）をどうして簡単に忘れることができましょうか（、いえいえ、まして「覚えておけ」とまで言われたのですから、この楽しさはずっと思い出となるでしょう）

経正さま（のこのときの歌は）、

うれしくも……なんとも喜ばしいことに、今夜の（楽しみを尽くした宴席の）仲間のうちに（私も）入って、（その私も、後々皆さんに）思い出されたり（皆さんを）思い出したりするきっかけになるにちがいない

と申したのを、「（おやおや、この人は）まさに自分が、格別に思い出されるのは当然なことだといい気になっているよ」などと、この（座の）人々が（からかって）笑ったところ、（経正さんが）「（私が）いつそんなふうに申しましたか（、そんなつもりではありませんぞ）」と（むきになって）抗弁したのも、（気のおけない身内どうしの即興の宴の雰囲気に興を添えて）おもしろかった（のを思い出すことだ）。

解答

問1 (1)＝兄弟　(3)＝音楽を奏でる　(5)＝傍で見ていても照れくさい　(8)＝きっかけ

問2 何もせずに夜を明かすのはもったいない

問3 中宮徳子から高倉天皇へ

問4 権亮朗詠し～でながめし（3～5行目）

問5 (6)＝まじき―打消当然・連体形　(7)＝れ―尊敬・連用形

問6 この座なる人々、なにともみな書け（10行目）・歌もえよまぬ者はいかに（13行目）

問7　経正の歌を自意識が強いと一座の人々がからかったところ、経正がむきになって抗弁したのが、公達の身内どうしで気兼ねのない雰囲気を却って盛り上げ、春の夜の風情を楽しむ華やかな宴に興を添えておもしろい。〔97字・解答例〕

【問題】（自習／京大・難関国公立大対応問題）

出典…『枕草子』　／　北海道大学　文学部　00年

現代語訳

僧都の君の御乳母などと（一緒に）、御匣殿の御局に（私が）座っていると、ある下男が、板敷の縁の近くにやって来て、「ひどい目に会いまして、どなたに（その思いを）訴え申し上げればよいのやら」と（言っ）て、（今にも）泣き出してしまいそうな様子で（いるので）、「いったい何事が（あったのか）」と問うたところ、「ほんのちょっと他所へ出かけました留守に、住んでおります所が焼けてしまいましたので、ヤドカリのように、人の家に尻を差し入れて（お邪魔して）ばかりおります。馬寮の飼料の草を積んでございました家から（火が）出まして（我が家にも）延焼したのでございます。ただ垣（一つ）を隔てた（だけの所で）ございますので、寝室に寝ておりました妻も、危うく焼け（死に）そうでして、少しも家財道具を運び出していません」などと言っているのを、御匣殿もお聞きになって、たいそうお笑いになる。

みまくさを……御秣を燃やす程度の火〔＝ぼや〕で（草を萌え出させる程度の春の日で）夜殿（淀野）までもがどうして（全焼してしまって何も）残らなかったのだろうか

と（私が）書いて、「これを渡してやってください」と（言っ）て（歌を書いた紙を結んで）投げやったので、（それを読んだ女房たちは）大声で笑って、「ここにいらっしゃる方が、（お前の）家が焼けたらしいというので、気の毒がって下さったのよ」と（言っ）て渡したところ、（下男は）広げて見て、「これは、何の短冊でしょうか〔＝何のお書き付けでしょうか〕。物はどれほど（頂けるのでしょうか）」と言うので、（女房たちは）「ともかくお読みなさいよ」と言う。（下男は）「どうして（読めましょうか、読めるわけがございません）。片目さえ開いておりませんので」と言うので、「（ならば）他の人に見せなさい。すぐにとのお召しだから、（私たちは）急いで（中宮の御前へ）参上するところなのよ。それほど素晴らしい物を手に入れた以上、何を（くよくよ）思うことがありましょうか（、よかったわねぇ）」と（言っ）て、一同笑いころげながら参上したので（、あとはどうなったかわからないが）、「（下男は）人に見せたのだろうか。家へ帰って（から、内容がわかって）どれほど怒っているだろう」などと、御前に参上して御乳母が（中宮に）申し上げたので、また（みんなが）大笑いする。中宮も、「（お前たちといったら）どうしてそんなふうに羽目をはずすのでしょうね」と（言っ

て）お笑いになる。

解答

問1　イ＝私がほんのちょっとよそへ出かけておりました間に　　ロ＝どうして焼け残らなかったのだろうか　　ハ＝急いで

問2　(1)＝侍る（3行目）　　(2)＝焼けたなりとて（8行目）

問3　留守中の延焼で家が全焼し、無一物になり居候状態にあること。〔29字・解答例〕

問4　女房たちが男に渡したものが、男の期待していた施し物の目録ではないどころか、男をからかう歌だったこと。〔50字・解答例〕

問5　女房たちに対する中宮の、他人の不幸をからかう行為をたしなめる気持ち。〔34字・解答例〕

解説

問1　大学入試で「現代語訳」および「解釈」の記述が求められたら、文構造を保持することが肝要だ。正確な品詞分解に基づいて、文中の語は対応する現代語が同じ順番で出てくるようにするのが基本となる。さらに、傍線部を含む節を見て、《主語・客語（＝直接目的語）・補語》といった構文要素が省略されていれば、字数制限の許す限りこれも補う。また、指示語が含まれる場合は、指示対象も明示する。朧化表現があれば具体化しておくことが望ましい。

イ　傍線部を品詞分解すると「あからさまに（形容動詞）／もの（名詞）／に（格助詞）／まかり（動詞）／たり（助動詞）／し（助動詞）／ほど（形式名詞）／に（格助詞）」となる。「あからさまなり」は重要基本語のひとつだから、この時期に初見の受験生はいないだろうが、念のために各自辞書義を確認しておこう。「ものに」はここでは「まかる」の補語として朧化表現となっている。「まかる」は「（ある場所から）離れる・遠ざかる」ことを示す動詞だから、「物・者」ではなく「場所」を示しているはずだ。「あ

るところ・他所」といった意味でぼかしているわけだ。さらに、「まかる」は《謙譲語》としての用法が基本だが、機械的にそう考えてしまうとここではまずい。というのも、古文の《謙譲語》は実際にはへりくだりでなく対象に対する敬意を示すために用いられるが、ここでは対象が「自宅の主人」すなわち「自分」となってしまうからだ。このような場合、「まかる」には改まった雰囲気を醸しだす用法（《尊大表現》などと呼ばれることもある）があることを思いだす必要がある。貴族に近侍する女房たちに下人が語りかけているのだから、訳文としては丁寧語にしておけば十分だろう。「たり」は《存続》の助動詞。平安中期にはまだ《完了》の用法はない。（参考書などで「完了」と書いてあるのは、「存・続」のうち前半、「結果の存在」のことだと考えるべきだ。）ここでは「存・続」の後半、「行為・状態の継続」の意味だと解釈すると意味が通じるので、「～している」の意味を訳文に盛り込むこと。「し」は《経験過去》の「き」の連体形。「ほど」は時を漠然と示す形式名詞。なお、傍線部の「まかる」は《不完全自動詞》で《主語・補語》を要求する。補語「ものに」は節中にあるが《主語》が省略されているので、文脈に応じて補うこと。家が焼けるのを見ていれば何らかの対処をしたはずだから、よそへ行っていたのは本人だと考えて「私が」を補う。（傍線部は「家が焼けた」という結果に対する従属節だからその主語は格助詞で表現すべきで、係助詞を使った「私は」では不適。）

ロ　傍線部を品詞分解すると「など（副詞）／残ら（動詞）／ざる（助動詞）／らむ（助動詞）」となる。「など」は直前に「よどの（＝夜殿）」という名詞があるので、傍線がついていないと副助詞の「など（＝等）」と勘違いしやすいが、傍線部をひとまとまりの言葉と見ると文末の「らむ」と呼応して《疑問の副詞》であることがわかりやすい。和歌の第四句は「など、夜殿さへ」とあってもよいところを文節が逆転しているわけだ。「残る」は歌の内容が火事に関することだから「焼け残る」などとする必要がある。傍線部だけに視野を狭めず前後をよく見るというのは、散文のみならず和歌でもなおさら重要だ。「ざる」は言うまでもなく《打消》。最後の「らむ」は傍線部冒頭の「など」と呼応して《原因推量》の用法だと判断できるから、この文脈では《現在推量》の「今ごろ～しているだろう」に拘る必要はない。下人によれば家はすでに焼け落ちたといっているのだから、「なぜ～たのだろうか」で十分だ。なお、傍線部には《主語》がないが、傍線部を含む節全体をみると「よどのさへ」が「残る」の《主語》として働いている（「さへ」は副助詞だから、ここが主語であることに気がつかない諸君もあったかもしれないが、日本語では本来《主語》および《客語（＝直接目的語）》は必ずしも格助詞を伴うとは限らず、いっぽう副助詞および係助詞は文節の格とは無関係に用いることができる）。この問題で主語を補う必要はない。

ハ　傍線部は形容動詞「とみなり」の連用形に接続助詞「て」が付いたもので、「とみに」だけで用いられる場合と意味的な違いはほとんどないと考えてよい。「とみ」は「頓」の字音「トン」に発音しやすく母音「イ」がついた「とに」が転じたもの（「節」が「せち」と読まれたり「stick」が「ステッキ」となったりするのと同様）。「とみに・とみなり」などの形で用いられる。さきに便宜上「形容動詞」としたが、「とみに」なら副詞とも言えるので、品詞には拘らなくてよい。「頓挫」などの熟語からわかるように文脈によっては「急に」などの訳しかたが適切な場合もあるが、ここでは直前に「すぐに来いとのことでお呼び出しがあったから」と言っているので、これに続けるのにふさわしい表現を工夫する。

問2　設問で抜き出しの単位を「文節」としている点に注意しよう。《文節》というのは専門家の間でも切り分けに揺らぎが出ることがあり、実は少々厄介な概念なのだが、大学入試レヴェルであれば現実的には《文節》＝「自立語で始まって次の自立語の直前まで」とされている。

(1)　「侍り」には《本動詞／補助動詞》および《謙譲語／丁寧語》というレヴェルの異なる使い分けがあり、《補助動詞》なら常に《丁寧語》だが、《本動詞》なら《謙譲語／丁寧語》の両方がある。さらに言えば、《本動詞・謙譲語》の場合も、意味を細かく区別すれば、「（職業・職掌的に）貴人に仕える」用法と「（状況的に）貴人の傍に控える」用法とに分かれる。文中での用法を確認しよう。（見やすくするため、それぞれ2文節の形で列挙する。）

2行目	申し／侍らむ」とて	＝	補助動詞・丁寧
3行目	侍る／所の	＝	本動詞・丁寧
同	焼け／侍りにければ	＝	補助動詞・丁寧
4行目	積みて／侍りける	＝	補助動詞・丁寧
同	出でまうで来て／侍るなり	＝	補助動詞・丁寧
同	隔てて／侍れば	＝	補助動詞・丁寧
4～5行目	寝て／侍りける	＝	補助動詞・丁寧
5行目	取う出／侍らず」など	＝	補助動詞・丁寧

9行目　　御短冊にか／侍らむ　　＝　補助動詞・丁寧

右のとおり、《謙譲語／丁寧語》の識別をするまでもなく、3行目の「侍る」以外はすべて直前の動詞を補助しているだけなのに対して、3行目では原義「存在」に関わる「住んでいる」の意味が活きているので、この《本動詞》だけが他と違うことになる。設問要求「文節」に鑑みると、直後の「所」は名詞で自立語なので、「侍る」だけを抜き出す。

(2)「なり」の識別としては《助動詞・断定》と《助動詞・推定》の違いに目を向けるのが第一だ。

《断定》の助動詞の注意点として次の諸点を挙げる。

＊接続が《体言・準体言》であって「連体形接続」ではないこと（「連体形」は《準体言》のひとつに過ぎない）。

＊連用形に「なり」だけでなく「に」の形があるのを見落としやすいこと。

＊《断定》のみならず《所在》・《資格》・《続柄》などの用法もあること。

《推定》の助動詞の注意点として次の諸点を挙げる。

＊接続が《（一般の）終止形およびラ変型活用語の連体形》であって単なる「終止形」ではないこと。

＊ラ変型連体形に接続する場合、多くは《撥音便無表記》の形をとること。

＊その場で音（人の声・会話を含む）が響いていない場合は《伝聞》の用法となること。

なお、右の《ラ変型活用語》には《動詞ラ変・形容動詞・形容詞補助活用》および《これらと同型の助動詞群（《打消》の「ず」の補助活用を含む）》があることを確認しておくこと。さて、前問と同様に文中での用法を確認する。

2行目　　誰にかは　　＝　断定

4行目　　侍るなり　　＝　断定

8行目　　焼けたなりとて　　＝　推定

9行目　　賜ふなり　　＝　断定

同　　御短冊にか　　＝　断定

9～10行目　いくらばかりにか　＝　断定

一見して、「焼けたなり」が「焼けたるなり」の《撥音便無表記》（「焼けたンなり」）であることが明らかなので、まずこれを《推

定》と見ることは動かない。「侍るなり」と「賜ふなり」は、「なり」それぞれ《ラ変動詞連体形》および《四段動詞終止形または連体形》に接続しており、形の上では《断定》と《推定》とが区別できないが、残る三つがいずれも「〜にかあらむ」を基本形とする係り結びの一部として《断定》だということは明白。設問で「用法が他と異なるのはひとつだけ」とわかっているから、文脈的な解釈を考えるまでもなく「侍るなり・賜ふなり」は自動的に《断定》ということになり、「焼けたなりとて」しか採れない。設問に「一つ」と指定がなければ、「賜ふなり」は「くださったものよ《断定》」としても「くださるんだそうよ《伝聞》」としてもどちらも意味は通じてしまう。設問をヒントに考えれば無駄が省けることのいい例である。

あとは「文節」の形が問題だ。該当部は《引用》を示す助詞「とて」を含むが、これが引用表現であるだけに、終止形である「なり」で切って「焼けたなり」としてしまいやすいのだ。抜き出し問題に部分点はない。気をつけよう。

なお、「焼けたなり」の「なり」は《推定》の用法である。「おまえの言うことを聞いていると、家が焼けたということなのね」と言っている。対話の中にあるとつい《伝聞》と考えがちだが、文法用語で言う《伝聞》とは「以前に聞いたことを何かのきっかけで想い出している」あるいは「以前に聞いたことを他者に伝達する」状態を言うのが普通である。

念のために言えば、「なり」は《名詞》の可能性も《形容動詞・活用語尾》の可能性も考えられる。右の識別で決着がつかないときには思い出せるようにしておこう。

問3 傍線部Aの「からい目」は形容詞「からし」の連体形イ音便に名詞が接続したもの。「からし」は「しょっぱい」のではなく「つらい」の意味だ（「辛い」と書けば同じ字になる）。現代語「かろうじて（＝からくして）」に残っている。とすれば「目」は現代語でもそのまま「つらい目を見る」あるいはまた「ひどい目に遭った」などと言うように、「直面する事態」の意であることになる。これを具体化せよと言うのだから、自分の置かれた状況を説明している下人の発言のなかで下人にとって「つらい」ことを抜き出してまとめるだけでよい。発言の要素を順に拾ってゆくと、

a　自分は出かけて留守中だったこと

b　自宅が火事に遭ったこと（「焼け侍りにければ」の「に」＝《完了》・「けれ」＝《詠嘆》で「全焼」の暗示）

c　他家に居候中であること

d　出火元は隣家であって自宅ではないこと

e　あやうく妻が焼死するところだったこと

f　家財道具を何も持ち出せずに焼け出されたこと

の六点について述べているが、このうちeはむしろ「不幸中の幸い」ともいうべきことだから、のこりの五点がもりこまれていればよい。順に「留守・全焼・居候・延焼（類焼・類火）・無一物」程度の語で表現できるので、これら五語を目安として、対応する表現が自分の答案に揃っているか確認すること。順番はこのとおりでなくてよい。（なお、「無一文」では金銭の話になるので「無一物」がベターだ。）

問4　傍線部Bの直前には「人にや見せつらむ」（「今ごろはもう誰かにみせているんじゃないかしら」）と言っているから、何かを「見せ」ることによって下人が腹を立てることにつながると発言者「まま（僧都の君の乳母）」は考えていることになる。その「何か」とはもちろん文中にある「歌の書きつけ」だ。

出題者による注釈でわかるように、この清少納言の歌にはいくつもの掛詞が用いられており、表面的には「野の草を萌え出でさせるのどかな春の陽射しで淀の野原が火事になるなんて不思議ね」と言いながら、真意としては「飼い葉を燃やす程度の軽い火事で家の奥にある寝室まですっかり燃えてしまうとは不思議ね＝どうせおまえが大げさに表現して私たちの同情を買おうとしていることなんかお見通しよ」と言っている。言っていること自体が少々毒を含むが、さらにそれを掛詞で表現したことによって、「私たちはおまえごときの策略に引っ掛かりはしないが、逆におまえのような無教養な者に私たちの掛詞がわかるものか」と相手を見下した態度も読み取れる歌だ。（清少納言は勅撰集選者を父に持って家名に泥を塗るまいと、歌合せなどの場では席から外れていてもよいというお墨付きを中宮から取り付けるほどに歌にコンプレックスを持っていたことはよく知られているが、そのわりに和歌に親しんではいないと見られる弱い立場のものにはこのような技巧的な歌も詠みかけることがあったというわけだ。歌自体はたしかに当意即妙で面白いが、彼女の性格はいかがなものか。）

女房たちは、下人が本人としてはうまいこと立ち回って何かせしめようと自分の「頭のよさ」を鼻にかけているのだろうと見取って、その相手を清少納言の歌でへこませてやろうと思っていたはずだ。それだけでも彼女たちにとっては痛快な座興になったことだろう。ところが、「この書きつけは何が書いてあるのでしょうか。どれくらいのものを施していただけるのでしょうか」と聞いてきた下人は、女房たちに「いいから読んでごらん」と言われても「そんなこと。私など片目も開いておりませんのに」と応

えていることから、無教養どころか文盲なのだということがバレてしまう。これを聞いて女房たちは、「じゃあ、だれかにでも読んでもらいなさいよ。忙しいから私たちはあっちに行くけど、いいものをもらってよかったわねぇ。キャハハハ、バイバイ」と、下人に期待を持たせたままで帰してしまうことで、後に真相に気付いた下人の落胆がさらに大きなものになることを思って、「笑ひまどひ（＝狂ったように笑っ）て」その場を去ったわけだ。

さて、傍線部は「まま」の発言に設けられている。当時の「乳母」は単なる「授乳係」ではなく、預かっている子が乳離れしても「女房頭」としてずっと後見役を続けるのが普通だった。ここでも、「僧都の君」は（子どもに僧官が与えられるのは不自然だと考えれば）すでに成人していることが推定できるから「まま」は年配になっており、他の若い女房たちと違って、下人の浅はかな狡猾さは理解していながら「だからといってあまりにいたぶり過ぎだ」と心配していることになる。

こういった経緯を踏まえて、「男に渡した書きつけ」が「男の期待に反して」いたことが解答の骨子となる。字数にゆとりがあるので、「男の期待＝何ほどかの支給つまり施し」と「反して＝からかい」と、両方とも具体化しておく。細かいことに言及すれば、歌を受け取った男はそれが「歌」であることがわかっていないのだから、答案の前半では「歌」でなく「書きつけ」程度の表現にしておき、答案末尾でその正体を説明するときに「歌」という語を出すようにすると、文脈理解の確かさをアピールできる。

問5　傍線部Cは、「御前にも～と笑はせ給ふ」の表現にはさまれているので中宮の発言であることがわかる。傍線部中の指示語「かく」は現代語「このように」とは違って、まさにそのとき問題になっていることであれば自分のことでなくても使えた。「コノヨウニ『ものぐるほし』」と訳すと中宮自身の心情になって文脈判断に失敗するので注意。ここでは直前に書いてある「また笑ひ騒ぐ」ことに対して「そんなに笑い騒ぐなんて」のつもりで「かく」と言っているのだ。とすると傍線部のことばの意味は「どうしてそんなに『ものぐるほし』いのでしょうね」ということで、「物狂ほし」は「常軌を逸している・あまりに騒ぎすぎている」といった意味で用いられており、主語は「おまえたちは」ということになる。これで傍線部の発言のもとになるのは「女房たちに対する中宮の気持ち」であることがわかる。

さて、清少納言はここで中宮を「御前にも」と係助詞「も」を使って表現しているから、「『笑ひ騒』いでいる自分たちと中宮との気持ちは通じている」ものとして書いている。ただし笑っているとはいっても、中宮は乳母の報告によって女房たちが不幸な下人をからかったことは知っているのだから、そんな思いやりを欠いた行為に同調するというのは不自然だ。発言内容である「騒ぎ

すぎよ」とあわせて考えれば、「軽いたしなめ」程度でよいだろう。年を取っていて生真面目な乳母は、若い女房たちの軽はずみな態度を苦々しく思っていながら、自分は中宮の弟の乳母ではあっても中宮自身の乳母ではないから、中宮の女房たちに対してあまり強くは出られない。その遠慮も汲んで、中宮がたしなめの言葉を発しているのだ。ところで下人のほうも、不幸な目にあったとはいえ、それをネタに貴族から施しをせしめようとしたのは褒められたことではない。中宮が笑っているのは、身分・階級の制度があった時代のことでもあり、「どっちもどっち」といった思いもあったものと考えればよい。

なお、「かく物狂ほし」いのが下人だと考えるのは、この場面が下人からはるかに離れた中宮の居室であることから、不適と言える。「中宮が女房たちに同調し、『なんてばかな男なんでしょうね』と下人を嘲笑している」などと考えるのはくれぐれも禁物である。『枕草子』の中宮（＝皇后）定子はまったく欠点のない理想の女性として描写されている。これは文学史的な知識として頭に入れておいてよいことだ。